師弟の訣れ

――太宰治の井伏鱒二悪人説――

川崎和啓

〈序〉

太宰治は昭和二十三年六月十三日の深夜、妻への遺言の反故と思われる紙に「井伏さんは悪人です」と書き記して死んだ。この言葉は太宰治や井伏鱒二の研究者にはよく知られているが、しかし、この言葉の真意は必ずしも明らかにされているわけではない。昭和五年以降の二人の関係をよく知る者には、井伏が太宰にとって恩人でこそあれ、〈悪人〉である理由はどこにもないと思えることが、一切の理解を困難にしている。相馬正一氏によると、太宰のこの言葉はすぐ反響をよび、同六月十七日付の『時事新報』はさっそく井伏の談話を載せているという。[1] それによると井伏は、「わたしのことを悪人だといつているそうだが全然思いあたるふしはない」と断ったうえで、「太宰君は最も愛するものを最も憎いものだと逆説的に表現する性格だから(ママ)そういうつもりでいつたのだろう(ママ)」とコメントしたことになっている。また、この「談話」を紹介した氏自身も、「井伏に対する恨み言は、所詮井伏に対する甘えでしかない。（略）疑う人は『井伏鱒二選集』の第一巻から第四巻までの『後記』を読んでみるがいい。太宰が井伏を真底嫌っていたなら、同じ時期にどうしてあれだけ愛情のこもった文章が書けるだろうか」という形で井伏の見解を後押ししている。[2] しかし、反故に記された太宰の文章を読む限り、私には、この言葉が愛情の「逆説的」表現とも「甘え」とも考えられない。二十年近い交際の中で、井伏はついに太宰の心の奥底を覗いたことはなかったのではないか。「おもてには快楽(けらく)をよそひ、心には悩みわづらふ」とは、「渡り鳥」の冒頭に掲げた太宰のエピグラフであるが、井伏は、太宰の類まれな文才と、装われた表むきの明るさやユーモアを愛したことはあっても、彼の「道化の底の陰惨」（「人間失格」）と直接向きあったことはついになかったのではないか、と思えるのだ。「同じ時期」に、太宰が井伏に関する「愛情のこもった」「解説」を書いていたことは事実であるが、そもそも『井伏鱒二選集』は太宰の口ききもあって発刊の運びに到ったもので、その意味では彼には〈愛情のこもった解説〉を書かねばならない義務があった。世評のイメージとは異なり、太宰は兄弟の中でも最も義理堅い性格であったという。また太宰が、心の底の「陰惨」な想いをおしかくして明るいサービスを演出できる、いわば精神の二重構造をもつ人物であったこともよく知られている。

そのような彼が、井伏に何のこだわりももたずに交際していた時期のことを「愛情のこもった文章」で書いたとしても、それはそれとして一応納得のいくことではあるまいか。つまり、井伏の解釈も、相馬氏の主張も、私には十分に納得することができないのである。

「井伏さんは悪人です」という言葉は、次のような文脈の中で記されている。

皆、子供はあま／り出来ないようで／すけど陽気に育／てて下さい／あなたを　きらいに／なったから死ぬの／では無いのです／小説を書くのが／いやになったからです／みんな／いやしい　欲張り／ばかり　井伏さんは悪人です[3]

この文章の中に「逆説」や「甘え」と解されるフレーズが一つでもあるだろうか。また、最後の一文だけを「逆説」や「甘え」と解しうる合理的な根拠を誰か提出できるだろうか。虚心に読めば、ここには太宰の内面の想いが率直に吐露されている、としか言いようがないのではないか。細かく言えば、「小説を書くのがいやになった」という言葉が「みんないやしい欲張りばかり」という想いを想起させ、その想いが「井伏さんは悪人です」という言葉に響きあっているようにも見える。たぶん太宰には井伏を〈悪人〉と言わなければならない内的必然があったのだ。私は、長篠康一郎氏のように井伏を何が何でも〈悪人〉に仕立てあげようという気はないが、〈悪人〉と言い残さずにはおられなかった太宰に固有の理由だけは明らかにしておきたいと思う。それには、死の前一年ぐらいの太宰の内部世界を見ておく必要があるように思える。

〈一〉

周知のように、死の直前、太宰治は「如是我聞」というエッセイを『新潮』に連載している。連載は太宰の自殺により結局四回で終わってしまうが、四回目で文壇の大御所志賀直哉にかみついたこのエッセイは、太宰の衝撃的な死と相俟って、当時から大きな反響を呼んでいたようである。研究者の方でも、このエッセイに対する言及は多く、評価もほぼ一定したものが出来つつあるように見える。たとえば次のような具合である。

。死の直前のエッセイ「如是我聞」（『新潮』昭23・3・5[ママ]、6、7）はかつてないほどの直接的な抗議、なりふりかまわぬ悪口雑言にみちており、死を予期してのことであったと思われる。
。このエッセイがその根底において「人間失格」のモティーフと深く結びついていることがわかる。（以上、東郷克美氏[4]）
。片や「如是我聞」、片や「人間失格」は、執筆の期をほとんど一にした、太宰治の硬軟両面の、しかし同一次元での精神構造から産出されたものである。
。「如是我聞」の果てにも死がある。この「抗議」を書いた太宰治自身にも、当然その予感があった。死を決意していたからこそ、十年越しの「抗議」が、あらゆる抑制を排除してできたとも言える。（以上、長谷川泉氏[5]）

。両者（「如是我聞」と「人間失格」のこと－引用者註）はいわば盾の裏表であり、またこれを合わせ鏡のように照らし合わせてみれば、作者の言わんとするところはいっそう明らかであろう。

。両者（同前）のモチーフ自体が深く交錯していることが注目される。

（以上、佐藤泰正氏[6]）

ここには二つの共通認識がある。ひとつは「如是我聞」のモチーフは「人間失格」のモチーフでもあったということ、他のひとつは、「如是我聞」を書く太宰には死の予感ないしは決意があったということである。このうち前者については三氏ともに共通しており、やはり卓見と言うべきであろう。たとえば、「如是我聞」で幾度となく訴えられるものに、芸術家の苦悩、弱さ、ということがあるが、これらには必ずしも具体的中味が盛られているわけではない。太宰治の読者なら、ある程度の察しはつくにしても、批評の言葉としてはどうにも具体性を欠いている。しかし、「如是我聞」とほぼ同時進行の形で執筆された「人間失格」をみれば、その内容はかなり明瞭になるのであって、その意味では「両者はいわば盾の裏表であり」、これを「照らし合わせてみれば、作者の言わんとするところはいっそう明らかであろう」という指摘はそのまま肯定できるように思える。

しかし、二つめの指摘には若干の疑問が残る。太宰治の〈死の決意〉については、太宰の死の直後にすでに「死を決しなくてはたつたこれだけのことすら書けないといふところに、太宰君の清潔なる弱さがあつた」という石川淳の評言[7]があって、東郷、長谷川両氏の見解もこの延長線上のものかと思われる。また、「如是我聞」の中で太宰が何度も「いのちがけ」という言葉を使っていることも、この見解に説得力を与えていると思える。しかし、「如是我聞」を読んでみると、太宰は必ずしも死を決意（ないしは予感）してこのエッセイを書き始めたのではないことがわかる。「如是我聞」の冒頭に次のような一節がある。

自分は、この十年間、腹が立つても、抑へに抑へてゐたことを、これから毎月、この雑誌（新潮）に、どんなに人からそのために、不愉快がられても、書いて行かねばならぬ。そのやうな、自分の意志によらぬ「時期」がいよいよ来たやうなので、様々の縁故にもお許しをねがひ、或ひは義絶も思ひ設け、こんなことは大袈裟とか、或ひは気障とか言はれ、あの者たちに、顰蹙せられるのは承知の上で、つまり、自分の抗議を書いてみるつもりなのである。

ここにあるのはあくまでも文学者としての〈意欲〉であり、どのような意味でも死の影ではない。現に第一回、第二回と読み進んでいっても、死を決意しなければ書けないような内容では決してない。特に二回目の〈花形文化人〉を攻撃した文章は、文壇外の学者への批判・反発であって、文字通り「腹が立つても、抑へに抑へてゐた」想いの発露ではあっても、死を覚悟した上での文章とは言い難い。ことは第四回まで行っても同様であって、第四回の最後は「売り言葉に買ひ言葉、いくらでも書くつもり」と結ばれていて、太宰の闘争意欲はいささかも衰えていない。従って、「如是我聞」連載の意欲も決して衰えていないのである。また仮に、「如是我聞」執筆当時の太宰に、肺結

核の病状進行などもあって、漠然とした死の予感があったにしても、それはこの時期に書かれた作品すべてについて言えることで、ことさらに「如是我聞」だけが〈死の予感〉を強調される必要はない。しかし、にもかかわらず〈死の決意〉説がそれなりの説得力をもつのは、第三回、四回の内容、特に四回の志賀批判が強烈なインパクトを与えているからだろう。この二回分は太宰の死後発表されているが、志賀に対する太宰の逆上気味の反駁と彼の突然の死が同時にやってきたことが、この〈死の決意〉説の形成と影響力に大きな力を与えたと思える。しかし、さきほどの一節が端的に示すように、少なくとも「如是我聞」を書き始めた時点において、彼は必ずしも自分の死を決意していたわけではない。むしろ問題なのは、「この十年間、腹が立つても、抑へに抑へてゐたことを、これから毎月（略）書いて行かなければならぬ。そのやうな、自分の意志によらぬ『時期』がいよいよ来た」と言っている点である。この「時期」とはもちろん〈死期〉を意味してはいない。「書いて行かなければならぬ」と決意させる客観的な状況がやって来た、ということである。太宰はなぜそのように判断したのだろうか。この問題の根底には、たぶん日本の戦後社会、特に戦後日本の文化状況に対する絶望と怒りがある。「如是我聞」でも批判されている、便乗文化人の軽薄な言動や上っすべりな繁栄を謳歌する文化状況を前に、有効な発言を一切行えない「先輩」作家に対するいらだちが太宰の中に醸成されていき、彼らが状況に対して真摯に生きてきたと自負する太宰に対しても軽はずみな批判を加え始めたとき、たぶん彼は発言の意志を固めたと思われる。〈自分の意志によらぬ時期が来た〉とは、「十年」前よりひどい文化的退廃を眼の前にした太宰の、遅ればせの反攻宣言だったのだ。しかし、この問題をこれ以上問うていくわけにはいかない。太宰の絶望と怒りには、井伏も多少なりとも関わっていたのではないかということが、ここでの本当の関心事だからだ。

〈二〉

太宰の中で井伏が果たした役割を見るには、まず「如是我聞」で太宰が何に「抗議」したかということを見ておく必要があるように思える。彼の〈一群の老大家〉への「抗議」ないし反発は、次の四つの文に集約的に示されている。

。私は、あの者たちに、あざむかれたと思つてゐる。ゲスな云ひ方をするけれども、妻子が可愛いだけぢやねえか。（第一回）

。私が日本の諸先輩に対して、最も不満に思ふ点は、苦悩といふものについて、全くチンプンカンであることである。

。弱さ、苦悩は罪なりや。（以上、第三回）

。いつたい、この作品の何処に暗夜があるのか。ただ、自己肯定のすさまじさだけである。（第四回）

「如是我聞」ではこれらと同じようなことが繰り返し主張されているが、彼の〈老大家〉たちに対する「抗議」の主な内容はこの四文に集約できる。つまり、日本の〈老大家〉たちにあるのはすさまじい自己肯定の精神と家庭生活の安楽への希求だけであって、他人の苦悩や弱さに対する理解が全くないため、「世の中から、追い出されてもよ

し」という覚悟で「いのちがけ」の仕事をしてきた後輩としては、自分の文学が抱えてきた「弱さ、苦悩」について「弱さ、苦悩は罪なりや」という懸命な問を突きつけざるをえない、ということになろう。このように要約してしまえば、「如是我聞」に示された太宰の肉声も表情も全く消えてしまう。しかし、彼が主張したかったポイントだけはまずこのように考えて差しつかえあるまい。また、第二回の〈花形文化人〉批判の根底にある思想もほぼこれと同様と考えてよいと思う。要するに、これまで太宰が孤独につみあげてきた文学的営為と、その過程でつねにひきずっていた苦悩を全く理解できない〈老大家〉たちの硬直した精神に対する忿懣が太宰の根底にはあった。また、彼の苦悩と文学に対して本質的に無知であるという点では、〈花形文化人〉たちも全く同断だった。そのためにこそ彼らも太宰の批判の対象となったのである。だとすれば、直接名指しされたのは志賀直哉だけだったが、太宰の文学と苦悩に対して無理解な者は全て彼のターゲットになってよかったはずである。「様々の縁故にもお許しをねがひ」「義絶も思ひ設け」という言葉が、太宰の攻撃の対象が決して志賀だけではなかったことを物語ってもいる。はたして井伏鱒二は本当に彼の標的の圏外に置かれていたのだろうか？

太宰は、「如是我聞」の中で、「芥川の苦悩」として「日蔭者の苦悶。／弱さ。／聖書。／生活の恐怖。／敗者の祈り」の五つをあげている。しかし、これらの「苦悩」は、すでに幾人もの人が指摘しているように、そのまま太宰の「苦悩」と考えてよいだろう。さきの「弱さ、苦悩」にしても、ここの「日蔭者の苦悶」以下の言葉にしても、その具体的内容は必ずしも明らかではないが、「如是我聞」の「合わせ鏡」である「人間失格」をみれば、彼の〈弱さ〉や〈日蔭者意識〉〈敗者意識〉が何によって形成されたかがはっきりする。

「人間失格」を見る限り、主人公の葉蔵に〈日蔭者意識〉を植えつける決定的な要因となったものは、モルヒネ中毒による「脳病院」への入院である。葉蔵には、生まれながらに〈人間〉に対する疎外感覚があり、また、人妻との心中、酒や淫売婦におぼれた生活など、〈人間界〉から追放されうる要素はいくつもあった。しかし、葉蔵にはっきりと〈人間失格〉を意識させたのはこの「脳病院」への入院であった。言うまでもなく葉蔵は太宰の意識の客体化された像である。とすれば、この「脳病院」への入院はほかならぬ太宰自身の中に決定的な傷痕を残していたはずである。そして、この入院が彼の「苦悩」や〈日蔭者意識〉の形成に大きな力をもっていたとすれば、つまり、以後の彼の文学に決定的な影響を与えているとすれば、この入院をどのように評価するかが太宰の苦悩を理解できるか否かのメルクマールだったと言ってもよい。図式化して言えば、同入院を〈世間〉の眼から麻薬中毒患者という異常な人物の異様な世界の出来事として見るか、〈世間〉的には〈負〉と見える脳病院への入院に芸術家の不幸と悲劇を見るか、という差異はやはり存在するはずである。太宰の言い分はもちろん後者の側にあった。薬物中毒のために〈廃人〉と化した太宰の姿がたとえ都会の与太のあさましい末路に見えたにしても、太宰には、「私は享楽のために、一本の注射打ちたることなし」（「HUMAN LOST」）という自負があった。一本三十～五十銭のパビナールを一ケ月に四百円分も打ちながら、そのように言い放つ太宰が〈世間〉から見ていか

にいい気な男に見えようと、薬物使用の背後に負いつづけていた「生きてをられないほどの苦悩」（「人間失格」）を自分にとっての唯一の〈真実〉と信じたところに、太宰の文学は成立していたのである。

東京武蔵野病院への強制入院[8]は、太宰にとって、苦悩する芸術家としてではなく単なる異様な〈廃人〉としてしか扱われなかったということを意味していた。新時代の芸術家の代表としてどこかで〈二十世紀旗手〉を意識していた太宰に、この自己意識と〈現実〉との落差は決定的だった。自分にとっての〈真実〉が〈世間〉では〈廃人〉にしか値しないということを痛烈に思い知らされたからである。この決定的落差の痛覚に、彼がうけた衝撃の全てがあった。それは彼の文学の全てを否定しかねない衝撃だった。しかし彼は、自己を〈廃人〉と見なした〈世間〉に対してなお〈廃人の苦悩〉を訴えようとした。そして、その過程で、自己の〈苦悩〉こそ〈真実〉だという想いの一方で、その〈真実〉を理解してほしいという「敗者の祈り」と、〈廃人〉としての〈日蔭者意識〉〈弱さ〉の自覚を確かに育んでいったのである。

太宰の内面にわだかまっていたこのような想いを、井伏は果たして充分に理解していただろうか。これはこれで大変興味をそそられる問題ではある。しかし、ここで問題になるのはむしろ太宰の意識の在り様だろう。つまり、井伏が太宰をよく理解していたかどうかより、太宰が井伏を自分の苦悩と文学のよき理解者と考えていたか否かが重要だと考える。

よく知られているように、武蔵野病院入院に際して重要な役割を果たしたのは井伏鱒二である。井伏によると、津島家出入りの呉服商であり、若き太宰の後見人でもあった中畑慶吉、北芳四郎の二人に入院を説得されても応じなかった太宰は、「どうか入院してくれ。これが一生一度の僕の願ひだ」と井伏に言われて入院を決意したという。[9]「HUMAN LOST」では、これが、「Iさん、一生にいちどのたのみだ、はひつて呉れ、と手をつかぬばかりにたのんで下さつて、ありがたう」となっていて、「HUMAN LOST」では、ここを含めて井伏への不信につながるような表現は一つも見当たらない。ところが、「人間失格」「如是我聞」ではやや様相が異なってくる。「人間失格」ではヒラメという悪役が登場するが、この人物は太宰の読者ならすぐ見当がつくように、前記北芳四郎と井伏鱒二をモデルにしている。「人間失格」は、太宰の実生活に素材を求めているとはいえ、虚構の世界である。従って、その登場人物を単純に実在の人物と重ね合わせることはできない。その限りでは、「登場人物の実在のモデルの詮索はまるっきり無意味」だとする塚越和夫氏の指摘[10]はそのまま首肯できる。しかし、太宰が、実生活上で恩義をうけた人物については、仮に内心面白くなく思っていても、作品の中で決して悪しざまに描くことがなかった（たとえば太宰を分家除籍処分にした長兄文治がそうである）ことを考えれば、明らかに井伏を下敷きにしていると思われる〈悪人〉を造型すること自体が異例のことなのだ。また、「如是我聞」の中で、「所謂先輩たちがその気ならば、私たちを気狂ひ病院にさへ入れることが出来るのである」（第三回）と述べていることも注目されてよい。さりげなく書かれてはいるが、太宰を「気狂ひ病院」に入れた「先輩」は井伏鱒二以外にはいないからである。文壇の「所謂先輩たち」を非難する文章の中に置かれたこの一節のさりげなさにごまかされなければ、「HUMAN LOST」で「Iさん（略）ありがたう」

と書いたときとは明らかに異なる井伏への想いをここに見ることができる。野原一夫[11]によれば、「如是我聞」第三回分の口述筆記が行われたのが五月の中旬、「人間失格」を脱稿したのが五月十二日だという。つまり、「みんないやしい欲張りばかり　井伏さんは悪人です」と書き遺して死ぬ一、二ケ月前には、太宰の中にすでに井伏を〈悪人〉とする意識がはっきりあったと思われるのだ。そしてその意識は、「様々の縁故にもお許しをねがひ、或ひは義絶も思ひ設け」てまで「所謂先輩たち」を攻撃しなければならぬ「時期」がやってきたと判断したことと無縁ではないと思える。なぜなら、井伏は太宰に〈悪人〉と罵られても仕方のない作品を現に書いており、その作品を太宰はこの「時期」よりやや前に確かに読んでいたと思われるからだ。

〈三〉

太宰治の研究者にはほとんど知られていないが、井伏鱒二には太宰のパビナール中毒と武蔵野病院入院を素材にしたと思われる「薬屋の雛女房」という小説がある。昭和十三年九月十五日に発売された『婦人公論』（同年十月号）に「ユーモア読物特輯　Ⅱ」として発表されたものである。

この作品は、新婚間もない〈薬屋の雛女房〉が、医薬品に無知なのを「パピナール中毒」の「背の高い眉目秀麗な青年」に巧みにつけこまれ、「禁止薬」であるパピナールをうかうかと売ってしまったことから始まる。その夜、夫から「パピナールが禁止薬ときいて、目がくらむほどびつくりした」雛女房は、さらに、「禁止薬を素人に売ると」店は「営業停止」になり、夫は「体刑」をうけるんだと聞いて動転し、もう「この秘密の罪を、今後は決して二度とくりかへさない」と決意する。しかし、この「眉目秀麗のお客」はそれからも何度も現われ、その都度、哀訴し、脅迫しては、〈雛女房〉から巧妙かつ狡猾にパピナールを買っていく。夫に相談することもできない〈雛女房〉は一人でやきもきすることになる。たとえば次のような具合である。

雛女房は頑として応じない覚悟をきめてゐた。

「あの薬品は、証明書をお持ちにならない方には、お売り出来ないことになつてゐます」

「でも昨日、私はこの店で売つていただきました」

お客は微笑するのを急に止し、難かしさうな顔をして云つた。

「昨日は売つて、今日は売らないのは変ですね。そんなことをしたら、もしこれが表沙汰にでもなつたら、お互ひに損ぢやないか？私は病人だからともかくも、お宅では大変な迷惑ではありませんかね？」

これは人の弱味につけこむといふものである。[ト]雛女房は何と答へていいやら返事が出来なくなつて、腹綿が煮えかへるやうな思ひで奥に逃げこんだ。しかしお客は店さきに立つて動かうとしなかつた。こんなとき主人がゐてくれさへすれば何とでも始末をつけてくれるだらうが、さうすれば彼女の秘密の罪は露見するといふものである。[チ]雛女房は居ても立つてもゐられない気持で、また店に出た。

この後、〈雛女房〉は結局この青年にパピナールを売るはめになるが、そのうち彼女はこの青年の奥さんと近づきになる。奥さんは彼女

に次のようなグチを言う。

「（略）病院に入れようとしましても、もう一日待つてくれと、涙をこぼしますので私には手のつけやうも御座いません。ぽろぽろ涙をこぼして、私の前に手をついて嘆願いたしますの」

（略）この奥さんの前で、眉目秀麗な死骸同然の御主人が、果して手をついて頭を下げるのだらうか。雛女房はその光景を想像して奇怪な感にとらはれた。奥さんは御主人のことを、A霊の抜けた生きてゐる死骸だと云つた。Bこの死骸が毎朝目をさますと、顔をしかめて大和田さんといふ医者へ出かけて行き、一本注射をしてもらふことになつてゐる。そしてCにやにや笑ひながら帰つて来ると、間もなく難かしい顔になつて今度は近藤さんといふ医者へ注射をしてもらひに出かけて行く。やはりDにやにや笑ひながら帰つて来て、間もなく難かしい顔になつて街の薬師屋へ因縁をつけに出かけて行く。たいてい薬師屋では拒否されて来るやうだが、たまには議論をふきかけて一個（ママ）または二箇（ママ）くらゐ手に入れて来ることがある。雛女房のこの店は、寛大といふ点において異数であつたといふことである。

太宰治のパビナール中毒に関する伝説を知っている者には、ここまでくれば、この「背の高い眉目秀麗な青年」が太宰治をモデルにしていることは明らかだろう。井伏には、「薬屋も後には閉口したさうだが、さきに禁を破つて売つた手前、そのままずるずると売りつづけて来たものださうである」[12]という回想文があるから、青年と雛女房のやりとりは、「薬屋」に聞いた話をもとにしたものと思われる。また、妻の初代からも太宰の中毒症状については聞いていたはずである。そのせいか、この麻薬中毒患者の田沢という青年を描く井伏鱒二の視点は、一貫して〈世間〉の側に属している。たとえば、雛女房と青年のやりとりでは、傍線部(一)(二)のように、「弱味につけこ」まれた雛女房の怒りや困惑や不安などがアピールされることはあっても、中毒に苦しむ田沢青年の内面が掘り下げられることは決してない。ただ威したり、からんだりしながら、何とか薬を手に入れようとする中毒患者特有の異常な言動が外側から描写されているだけなのである。また、傍線部A～Dには、「奥さん」の眼に映った田沢の印象がそのまま記されており、薬物使用の背後で「生きてをられないほどの苦悩」を負っていたとする太宰の姿はどこにも反映されていない。つまり、田沢青年に関して描出されているのは薬物中毒患者としての〈異常さ〉ないし〈異様さ〉だけであって、井伏は、彼の〈異常さ〉と雛女房の〈善良さ〉を対照的に配置させることによって、彼の〈異常さ〉を〈世間〉の好奇な眼差しの前に徹底的にさらしているように見える。この田沢青年を「人間失格」の葉蔵と比較すれば歴然とするのだが、ここには、麻薬中毒患者の内面に対する同情も理解も一切欠落しているのだ。

同じことは精神病院の運動会の場面についても言える。いつか「仲のいい友達」になった雛女房と田沢の奥さんは、精神病院を田沢が退院する日、そこの運動会が催されるというので、二人で見物に出かける。「雛女房の主人が気狂ひの運動会はつまらないだらうといふのをきき流し」て来てみると、田沢は「魔薬（ママ）団応援団」と書かれた旗の下

にいた。その運動会の様子がたとえば次のように描写されている。

しかし競争のコースを満足に走り終つたものは一人もゐなかつた。七人のうち或る一人は、出発の合図と共に逆の方角に駆け出して、第一コーナーのところまで行くと急に廻れ右して出発点に引返して来た。また或る一人は出発の合図と共にのそのそと歩き出して、途中まで歩いて行くと大儀さうに引返して来た。このやうに運動場を満足に一周する者は一人もなく、また会場の整理者たちは出場者を各組に連れ戻すのに一苦労した。

ここには、「雛女房の主人」が予見した通りのデタラメな運動会風景が描かれている。井伏鱒二の昭和十一年の「記録」によると、彼は、太宰が武蔵野病院を退院した日とその前日の二回、太宰を見舞っている。[9] その退院前日の十一月十一日のところに、「病院をたづねる。(略) 夜になつて病院を辞す」とあって、同病院でこの日挙行されていた運動会を井伏は偶然見たのではないかと思われる。というのは、昭和十一年十二月一日発行の『文芸懇話会』第十二号に井伏は「病院の運動会」という八百字程度のエッセイを発表しており、そこで次のように書いているからである。

私は友人を見舞ひに行きたまたま開催中の運動会を見た。「麻薬団」と書いた大のぼりを立てた応援団や、ボール紙のメガホンで湧き立つてゐる応援団が組織され、なかなか盛大な運動会であつた。しかし競技に出る選手といふのはたいてい狂人で学校の運動会とは趣きがちがつてゐる。号砲一発みな駆け出すといふわけには行かないのである。のそりのそりと歩き、それからコーナーまで歩いて行くと立ちどまつて瞑想に耽るものがある。さうかと思ふと逆の方向に駆け出すものがある。駆け出したかと思ふと横にそれて頭髪をかきむしるものがある。号砲が鳴つても動かないものがある。百種百態、みな奇想天外な行動を敢てする。[甲] こんな運動会は罪である。ながく見物するにしのびないものがあつた。夜になるとあばれまはる狂人がゐた。(略) 私は友人の病室でその騒ぎをきいてゐた。すると見知らぬ老紳士がはい(ママ)つて来て私に挨拶した。

「自分はかねがね操觚界においてこの病室の患者と親しくしてゐるものであります。(略)」

さう云つて老紳士は出て行つた。

この運動会の様子はさきほどの「薬屋の雛女房」の運動会の描写と酷似している。また、井伏が夜まで病院にいたというのはさきほどの「記録」の中の記述と同じである。さらに、「操觚界」云々のことを言った一見紳士風の「狂人」が太宰の部屋にやってきたということを井伏は別の回想文[13]でも書いており、その場面は、「薬屋の雛女房」の末尾でも詳しく描写されている。これらは、「薬屋の雛女房」が太宰治をモデルにして創られたであろうことの確実な根拠にもなる。しかし、ここで問題にしたいのはそういうことではない。井伏がどのような観点から「狂人」の運動会を描写しているかが問題である。いまあげた二つの文章を見ると、この二つは、そこに「狂人」のデタラメな競争ぶりが描写されているという点で共通しているが、唯一点、決定

的に違うところがある。それは、後者のエッセイには、傍線部㈲のような、「罪である」「見物するにしのびない」という、デタラメな競争をする「狂人」の姿をあるいたましい感情とともに見る井伏の優れた感性が示されているのに、「雛女房」の方には、そのようなものが一切出ていないということである。エッセイの方では、短いながらも全体として「狂人」に対する〈同情〉がにじみ出ているのに、「雛女房」の方では、ただその〈異様さ〉が印象づけられるだけなのである。

太宰治が信頼していた井伏鱒二という作家は、決して「薬屋の雛女房」に見られるような作家ではなかった。彼には社会の底辺でうごめいている弱者に対する優しい眼差しと同情があった。そして、そのような弱者を描く彼の作品には、どこか深い哀愁が漂ってもいた。井伏の作品集『夜ふけと梅の花』に収められた作品を「世にめづらしい宝石」[14]と絶賛した太宰の中にあったものは、文章や作品構成の巧みさもさることながら、井伏のそのような優しさや哀しみに対する共感でもあったはずである。しかし、「薬屋の雛女房」にあるものは、ただ、薬品中毒者の〈異常さ〉と、それを〈世間〉の好奇な眼差しに売り渡す軽薄な意図だけであって、『夜ふけと梅の花』に示された優れた詩情や感性はどこにも見られないのである。井伏は、太宰を武蔵野病院に入院させたあと、「いかにも残酷なことをしたやうな気持がして、帰りに酒で鬱を散じることにした」[12]という。この言葉を信じるなら、井伏はその「鬱」を基点にすえたもうひとつの「薬屋の雛女房」が書けてもよかったはずである。「生きてをられないほどの苦悩」を背負って薬品中毒になっていった作家の不幸を描いてみせてもよかったのだ。しかし、ここにあるのは、むしろナンセンス作家と呼ばれていた井伏のもうひとつの貌であって、太宰の苦悩と不幸に対する理解と同情は微塵もみられない。太宰がもしもこの作品を読んだとしたら、彼は、信じていた「先輩」作家に裏切られたという衝撃と、神経を逆撫でされるような怒りを確実に覚えたはずである。そしてそれは、志賀直哉の言葉と作品が与えた以上の憤怒を太宰治に与えずにはおかなかったはずだし、「この十年間（略）抑へに抑へてゐたことを（略）様々の縁故にもお許しをねが」ってまで書こうという決意にどこかでつながっていったはずである。

〈四〉

「薬屋の雛女房」は昭和十三年に『婦人公論』に発表されたあと、同十四年三月発行の小説集『禁札』（竹村書房）に収録された以外はどこにも収められていない。そして、この二度の機会に太宰がこの作品を読んだかどうかもわからない。（ただ、この二つが発行されたのは、太宰が山梨県の御坂峠にこもり、井伏の媒酌で美知子夫人と結婚して甲府に新居を構えた頃であり、東京との関係が稀薄になっていたことから、これらを目にしえなかった可能性は十分ある。）また、『井伏鱒二選集』の「後記」によると、太宰は、同二十二年の「夏」にはその編集のために井伏の「作品全部を、あらためて読み直してみる事」になったというが、このとき彼が本当に井伏の「作品全部」を読んだかどうかもわからない。しかし、太宰はこのとき「薬屋の雛女房」だけは間違いなく読んでいると思われる。

『井伏鱒二選集』には、『禁札』に収められた作品のうち「中島の

柿の木」「庭つくり」「一風俗」「山を見て老人の語る」という四篇が第二巻と四巻に収められている。このうち、「中島の柿の木」を例にとってみると、この作品は昭和十三年十月号の『話』に発表されたもので、『禁札』に採られたあとは『選集』に採られるまでどこにも収められていない。「中島の柿の木」の初出本と『選集』版を比べると、『選集』版には一〇八の訂正個所があって、『選集』収録にあたって井伏が補筆・改稿を行ったことがわかる。ところが、その一〇八の訂正個所のうち七〇個所についてはすでに『禁札』版でも訂正されており、残り三八がこのときの改稿なのである。このことは、井伏が『選集』版のために「中島の柿の木」を補筆訂正したとき、『禁札』版を底本にしたことを明瞭に示している。そして、それはまた、太宰治も十年ほど前の初出の雑誌によってではなく、井伏同様、『禁札』版「中島の柿の木」を読んで選集した可能性がきわめて高いことをも示唆している。

さらに、太宰が編集した『選集』の第四巻までに収められている小説、ならびに同『選集』に載せるつもりで太宰が作った「草案」に記されている小説の全ては、それまでに井伏の作品集（計十三冊）、ないしは、井伏に関係のある叢書・全集（各一篇）に収められているものばかりであって、太宰が作品を選ぶに際して、それぞれの初出の雑誌によってではなく、これら単行本としてまとめられたものに拠って選集作業を進めていたことがうかがわれるのである。だとすれば、『禁札』から四篇の小説が選ばれていることから考えても、さきほどの改稿の跡から考えてみても、太宰が『禁札』を読んでいたことはまず確実であり、従って、そこに収録されていた「薬屋の雛女房」を読んだであろうことも間違いないと断定できる。つまり、太宰は、自ら進んで引きうけた『井伏鱒二選集』の編集作業の中で、いわば太宰を異様な人物としてさらしものにしている井伏鱒二と衝撃的に出会い、あの入院にともなう陰惨な記憶を屈辱的に想起したはずなのである。

以上の推測が正しければ、昭和二十二年の「夏」以降に太宰と井伏の間に起きた不可解な出来事はすべて説明できる。たとえば、昭和「二十二年の暮」に同人雑誌『素直』の会合に出席を依頼された太宰が、そこに井伏が同席するだろうことに微妙なこだわりを一瞬示したこと[11]、翌二十三年の正月に恒例になっていた井伏家への年賀を太宰がしぶったこと[13]などは、この二十二年「夏」に太宰が「薬屋の雛女房」を読んだとすれば、きわめて自然に納得される。野原一夫[14]によると、太宰が「如是我聞」の「二」を口述筆記させたのは二十三年の四月二日と六日だったという。井伏鱒二は同月の三日と十四日に太宰を訪ねたらしく、山崎富栄の日記[16]には、その両日のことがそれぞれ、「夜、井伏さんみえる。甲斐ない人」、「お仲人をした井伏さんが、太宰さんを苦しめている。ちょっとした偽善者だ」と記されている。このとき井伏が、長篠康一郎氏が「推測[17]」するように、太宰に「如是我聞」の執筆中止を勧告したのかどうかはにわかに断定できないが、少なくともこの時点で、両者の関係が以前のようにしっくりしていなかったことだけは確かであり、富栄の日記が全体的に太宰一辺倒の書き方になっていることからも、太宰がこのとき井伏になんらかの不服、反発を示したことは間違いないだろう。太宰の中には井伏に反発する理由がすでに充分にあったのだ。この約一ケ月後に「如是我聞」の「三」の口述筆記が行われ[11]、その中で、「先輩たちがその気ならば、私たち

を気狂ひ病院にさへ入れることが出来る」と述べたことがそれをよく示しているように見える。

井伏は、戦後太宰が自分を避けていることに感づいており、それを太宰が井伏に対して「旧知の煩はしさ」を感じていたためと解している。つまり、「私の口にしたくないある対象（山崎富栄のこと－引用者註）に向けるギャラントリイ（情事の意－引用者註）のため、（略）旧友たちに対して旧知の煩はしさ」[18]を感じていたのだろうと言うのである。しかし、太宰はすでに富栄との「ギャラントリイ」に陥っていたにもかかわらず、二十二年夏には、疎開先から帰京した井伏のために一席を設け、わざわざ彼女を井伏に紹介したうえで、『井伏鱒二選集』発行の計画を井伏に告げているのである。この一事をもってしても、富栄の件で井伏を避けたのではないことは明らかであろう。同時に、太宰がこの時点ではまだ井伏を避けていないこともわかる。井伏は認めたくはないだろうが、この直後に、太宰には井伏を嫌忌しなければならない理由が確かに生じたのだ。それがあの「薬屋の雛女房」との出会いであったことは言うまでもない。そして、さきほどの同人誌『素直』への会合をしぶったとき、太宰が、井伏と志賀直哉の友人瀧井孝作の出席に微妙なこだわりを示したということ[11]が象徴的に示すように、「二十二年の暮」には、太宰には、井伏を志賀と同列と見なす意識、つまり井伏を＜悪人＞とみなす意識が確実に生じていたと思われる。「如是我聞」に「先輩たちがその気ならば、私たちを気狂ひ病院にさへ入れることが出来る」と書いたり、「人間失格」の中で明らかに井伏鱒二をモデルにしたと思われる「ヒラメ」という悪役を造型したのもその延長上のことであって、この時点で、太宰の心は井伏鱒二にたぶん永遠の訣れを告げていたのだ。

太宰治と井伏鱒二は気質的にはほとんど相容れるところのない作家だった。しかし、太宰は、実生活の中で、井伏との気質的な、あるいは、思想的な＜差異＞を井伏に直接ぶつけることはほとんどなかった。そのため井伏は、おもてに装っている太宰の「快楽」をともに楽しむことはあっても、その底に秘められていた「苦悩」をともに苦しむことは決してなかった。その意味では二人の離反はいつ起きても不思議はなかった。また、視点を変えれば、二人の間に起きた齟齬は、＜生活の達人＞井伏鱒二と＜生活不能者＞太宰治との間に起きた＜悲劇＞であって、必ずしも井伏が＜悪人＞として非難されることはない。しかし、「如是我聞」の中の言葉を借りて言えば、「薬屋の雛女房」のような作品を書くことの「犯罪の悪質」さぐらいは、井伏も認識していてよかったのである。

（了）

註

（1）相馬正一『評伝　太宰治』第三部（筑摩書房、'85・7）。

（2）相馬氏の「甘え」説は佐藤春夫「井伏鱒二は悪人なるの説」（『作品』、'48・11）に示された考えの延長上のものと思われる。

（3）長篠康一郎編『雨の玉川心中』（真善美研究所、'77・6）による。

（4）東郷克美「太宰治の『如是我聞』論争」（『解釈と鑑賞』'72・7臨増号）。

（5）長谷川泉「如是我聞」（『解釈と鑑賞』'83・6）。

(6) 佐藤泰正「『人間失格』『如是我聞』との関連をめぐって」（『太宰治』1、洋々社、'85・7）。

(7) 石川淳「太宰治昇天」（『新潮』'48・7）。

(8) 相馬正一氏によって明らかにされた、太宰は入院を事前に承知していたという事実は、太宰にとってはほとんど何の意味ももたないと思われる。彼が同意したのはあくまでも同病院での〈治療〉に対してであり、鉄格子の中に「狂人」として入れられることではなかったからである。「HUMAN LOST」の中で繰り返し訴えられている「金魚も、ただ飼ひ放ち在るだけでは、月余の命、保たず」というフレーズは、彼が同病院で人間としての主体と尊厳を完全に奪い去られたと認識していたことを示している。そしてこの認識がこのとき太宰が受けた衝撃の中核をなしていたと思われる。

(9) 井伏鱒二『太宰治』（筑摩書房、'89・11）の中の「十年前頃」（初出は『群像』'48・12）。

(10) 塚越和夫「人間失格論」（『批評と研究　太宰治』芳賀書店、'72・4）。

(11) 野原一夫「『如是我聞』の背景」（『新潮』'83・11）。

(12) （9）の書の中の「太宰治の死」（初出は『文芸春秋』'48・8）。

(13) （9）の書の中の「太宰治のこと」（初出は『文学界』'53・9）。

(14) 『井伏鱒二選集』第一巻の「後記」。

(15) 津島美知子『回想の太宰治』（講談社文庫、'83・6）。

(16) （3）の『雨の玉川心中』に所収。

(17) （3）の書の「注記」。

(18) （9）の書の「解説」（初出は新潮社『太宰治全集　上』、'49・10）。

◎本稿でとりあげた「薬屋の雛女房」の存在については、井伏鱒二の書誌研究家である兵庫教育大学の前田貞昭先生にご教示いただいた。先生には、その他にも本稿作成上有益なアドバイスをたくさんいただいた。衷心より感謝申しあげたい。